

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391300151		
法人名	株式会社 ラディカ		
事業所名	グループホームフォーシーズン		
所在地	宇城市松橋町久具2059-1		
自己評価作成日	令和3年11月1日	評価結果市町村受理日	令和4年1月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和3年12月16日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者のこれまでの生活歴や背景を知ることことで、一人ひとりの今に寄り添うことを大切にしています。本年4月より2ユニットにて運営を開始し、今まで以上に個別ケアを重視し、日常生活や会話の中からご利用者の今したいことを見つけ、その方のニーズに合わせたケアを心掛けております。ご入居様が自分らしく生活できるよう職員同士で話し合い、日々の生活を支援しています。定期的に行うイベント、おやつ作りや季節に合わせた食事作りも楽しみとなっています。ご家族や本人様に関わる方々との関係を途切れない様に連絡や情報を発信しています。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

令和3年3月に2ユニットと増床されたホームでは、開設当初からの『一人ひとりの歩みを大切に、一人ひとりの今、この時に寄り添います。』を理念として、コロナ禍という制約の中で、職員の創意工夫により充実した生活を支援している。例として入居者の出来る力を生かした食支援や運動会、車中からの紅葉見学等に出している。最高齢99歳という高齢化や、スモアの使用等重度化傾向も見られる中、看護職等を手厚くし、協力医療機関との連携により終末期までの支援に全職員が心一つに取り組み、コロナ禍にこれまで以上に家族へ情報を発信が安心に繋がっている。職員一人ひとりが自然体での明るいケアに、1日1回は入居者の笑顔をみたいとする個人の目標達成に向けたケア姿勢も表われており、認知症ケア推進へますます寄与されるであろうと大いに期待したいホームである。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12) ○
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31) ○	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) ○		

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所「理念」を玄関と職員休憩室に掲示し、ミーティングやカンファレンス時にいつでも確認し実践できるように心掛けている。	開設時からの理念である『一人ひとりの歩みを大切に、一人ひとりの今、この時に寄り添います。』を継続し、掲示により意識強化や新規入職者には研修の中で指導し、全職員がベクトルを同じくしている。また、認知症の理解を深めるとする目標や職員個々が目標を持ち、入居者の今までの歩みを大切に入居者の思いに寄り添い、個々に合ったケアを実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	フォーシーズン便りを毎月発行し活動内容を掲載し、地域の回覧板で掲示している。	毎月のフォーシーズン便りの回覧や、これまでの地域の中での活動により啓発は行き届き、充実した地域の中での生活であったが、コロナ禍に外出が制約され、地域住民との交流は行わず、室内での生活に工夫を凝らしている。入居者は散歩する園児の姿に心を躍らせ、受診時等車窓からの眺めを楽しんでいる。	コロナ禍に、地域交流室での交流も出来ない状況にある。コロナ感染症が落ち着けば、これまで出かけられていた地域の生き生きサロンや、傾聴ボランティア等として訪問される方々との交流が再開されることを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナの為開催できていないが、運営推進会議において、区長や民生委員、住民代表1名に参加していただき、認知症の方への理解と支援方法を説明し、地域で困っていることはないか情報提供を行っている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一回運営推進会議開催を紙面上で開催。入居者の日頃の様子や生活状況を報告。現在抱えている問題などに対し、助言や意見をいただきながらサービス提供の参考にさせていただいている。	運営推進会議は書面審議として、区長や民生委員、地域代表等に中止のお知らせと資料を持ち届け、説明後意見等を聞き取りし、受領の署名をもらう体制であり、ケアサービスの参考に繋げている。運営状況は写真による開示や身体拘束についての報告も行われている。	次のステップとして、運営推進会議の委員の方々の意見や提案の収集の場として署名欄と共に意見欄も追加する等、意見等を出して頂けるような書面にされると更に良いと思われ、検討いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	行政機関などに対し、疑問や日頃のケアについての相談、また情報提供を行うことにより、協力関係の強化に取り組んでいる。	コロナに関する情報を得たり、必要な案件の相談等に適切なアドバイスを得ている他、運営推進会議の資料提出等統括管理者を中心に行政との関わりを持つ等協力関係が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人内の身体拘束廃止委員会を中心に、法人内で勉強会を開催し、職員が正しい知識を身に付け、業務で実践できるように努めている。	研修の他、法人内の身体拘束廃止委員会（現在はズーム）での事例検討や他の取り組み等を話し合い、更にリーダー会議の中で検討している。入居者の帰宅願望や徘徊等の行動には理由や目的があると捉え、危険回避として夕方や夕食時等行動パターンを把握し全員で共有し、勉強会により拘束の弊害は全員が正しく認識している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内での勉強会を通して、日頃のケアの見直し、また、不適切なケアがないかをミーティング内で話し合い虐待防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	「権利擁護」制度について、外部研修や法人内勉強会を開催。権利擁護が必要な方には職員間で話し合い、ご利用者のご家族に制度の説明を行うことを心掛けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	施設見学時や契約時にはご本人やご家族からの疑問や質問には丁寧に答え、不安なことはないか十分に話を聞くように心掛け、納得して頂ける様に努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族の不安な事や疑問など、十分話を聞くようにし、ご家族の意見や要望は職員間で話し合い実践できるように心掛けている。	家族には毎月請求書とともにフォーシーズン便りを配布し、ラインやグループライン、電話等により情報を発信している。また、玄関内の改装されたテラスを活用し面会や意見や要望を収集している。家族からの質問や”して欲しい事”等の要望を検討し、苦情と思われる事案は些細な事でも苦情相談簿として残し、精査する体制としている。例年であれば家族会も開催されていたが、コロナ禍に中止している状況である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は週一回の管理者会議に出席し、会議内容を職員に伝えミーティング時に反映させている。また、ミーティングで出た意見や提案を次回会議に挙げている。	月曜日毎に管理者会議を開催し、法人の運営状況や人員体制、法人内の利用者状況等を話し合い、職員も法人の他の事業所の事であっても知る必要があるとして全職員との共有化を図っている。毎日のミーティングにより職員の意見等を収集し、現場の問題は全リーダーで解決に向け検討している。希望休や育児休暇、有給等も取りやすい環境であり、働きやすい環境である。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課と個人面談を行い職員の要望などを確認している。また、職員の特性などを評価し、異動や昇格の検討を行い、家庭環境を考慮した働きやすい職場環境づくりを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	宇城圏域の勉強会や毎月一回のスタッフ勉強会を開催し、職員に可能な限り出席を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宇城地区グループホーム連絡会に出席し、勉強会や研修などを通じて情報交換を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時にはご本人やご家族の方からお話をする機会を設け、今までの生活歴や入居にあたりたりの要望などの情報収集に努め、入居後安心した生活を送っていただけるよう良好な関係づくりを心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居希望時にはタブレットで施設案内を行い、ご家族の本人に対する気持ちや要望などを聞き取り心配なことには丁寧に答えるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前にご本人やご家族と担当者会議やカンファレンスを行い、必要なサービスを導入するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は入居者様の生活スタイルを大切に、掃除や食事の準備、片付けを一緒に行うなど、役割や楽しみを持って生活出来るように心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員はご家族との電話やメールで情報を交換しながら、日常の様子も写真を活用しお伝えしている。ご本人やご家族の関係が良好であるように支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	離れた家族とはSNSを活用し動画や写真、TV電話でのやり取りを行っている。地域やご友人とは電話やガラス越しでの面会を行っている。	家族の面会や、入居しても友人から電話をもらう方、携帯を持ち込み家族とのやり取り、父の日の晩酌、七夕短冊作り等習慣の支援しているが、コロナ禍の中で馴染みの場所への外出は困難な状況にある。室内での生活が殆どの為、お笑いの動画を見もらう等笑いを引き出す等創意工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	行事やレクリエーションなどを通じて馴染みの関係を築いて頂くよう支援している。トラブルが起きたときは職員が間に入り対応している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期入院や個別の事情などでサービスの利用が終了した後もご家族と連絡を取り相談や支援ができる体制を整えている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	言葉だけではなく、表情やしぐさなどの非言語コミュニケーションを通して、希望や思いを把握できるように努めている。ご家族にも本人の希望を伝え、電話や担当者会議などで本人の思いを家族に伝えている。	入居者との会話の中から思い等を聞きとりする等食べたいもののリクエストを食に反映させている。発語減少対応として極力声掛けを行うことをプランに組み入れ、意思疎通困難な場合は家族から聞き取りしている。また、アイコンタクトや笑顔をバロメーターとして捉え、職員同士で入居者の表情や笑顔を話し合うとともに、家族にも表情等を伝えながら本人本位になるよう検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日頃のコミュニケーションやご家族との話などで、これまでの暮らし方や生活環境を聞き、把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の状態変化をケース記録に残し、一人ひとりの心身状態、環境変化などは個人申し送りに記載し職員間での情報共有をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者を中心にモニタリングを行い、遠方に暮らすご家族と電話で本人様の状況をその都度報告を行い、確認を取り計画書に反映させている。	毎月のモニタリングや3ヶ月毎に担当職員と介護計画担当者と話し合っている。家族と退院後の生活について電話で検討し、新たなプランの作成するとともに、介護認定更新に向け、モニタリング・評価を通して継続可否を見極め新たなプランとする等現状に即したプランが作成されている。	現在担当者会議として電話で家族の意向などを聞き取りされている。コロナの時期、ホームでの生活やケアが見えないことで家族も不安ではないかと思われる。家族に介護計画書を発行することを検討いただき、不安解消の一環とされることを望みたい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録や普段と違う言動や変化がみられたときは詳しく記録し、ミーティングにて情報の共有を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	誕生日には、「お寿司を食べたい」、「鰻が食べたい」などのニーズに対し実践している。また、何かをやりたいなどの希望がある際には、それが可能かどうかをミーティングで話し合いを行い、実践できるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で外部機関との関わりが少なかったが、今後は地域のいきいきサロンや傾聴ボランティアなどの地域資源を活用し参加を促していきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医協力のもと、体調の変化や緊急時には、ご家族と連絡を取り、受診や往診にて対応している。また専門医を受診する事で安心した生活が送れるよう支援している。	入居時にかかりつけ医や専門医を継続して支援する旨を伝えており、元々のかかりつけ医を家族と毎月受診する方もおられる。内科的なかかりつけ医が無い場合には協力医両機関への変更により訪問診療としている。職員は入居者の異常を早期に見極め、協力医の指示を仰いだり往診にて支援している。また、専門医の受診時には家族の協力を得ながら、情報提供書によりホームでの状況を発信し、職員も同行し入居者の現状を共有している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職は日常的な健康管理や利用者の状態を把握している。気づきや体調変化時には、主治医へ相談して適切な指導や援助を受けられるよう、主治医との連絡調整連携を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には職員が定期的に面会し、状態の把握に努め、担当看護職員・相談員と連絡を取り、その都度主治医に報告しながら、いつでも退院ができるよう体制を整えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時にご家族へ説明を行っている。また、事前指定書をご家族に記入していただき、ご本人、ご家族の意向を知り、今後についての話し合いをしている。	看取り指針をもとに、入居時に方針を説明し、事前指定書に現時点での考えを書いてもらい、入居者の状態を見ながら段階的に話し合い、その都度指定書を取り交わしている。家族の中には最期までを希望されており、本年度看取りケアを実践している。年間研修計画に看取りケアを組み入れ、職員の不安を和らげ、偲びのカンファレンスで振り返るとともに、家族の言葉が職員の自信やモチベーションとして生かされている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急対応マニュアル連絡体制などを職員間で徹底させている。またAEDの使用方法について勉強会で実技講習を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防訓練の際は、可能な限り消防署署員の立会いのもと、年2回の訓練を行っている。	今年度は自主訓練の実施、及び法人合同の訓練では避難経路を実際に歩きながら注意点や問題点を確認し、10月には2ユニットになって初めての避難訓練を行っている。自然災害については各事業所の備蓄の状況を話し合い有事に備えている。有事の際には近隣住民も駆け付けられており、今後も地域との協力体制について話し合う機会があれば良いと思われる。	業者により安全点検は行われているが、自主点検は行われていないようであり、定期的な自主点検を検討頂きたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格を尊重する対応を心掛け、傾聴と共感に重きを置いたケアを実践している。個別の対応、不適切な声掛けはないか職員同士で話し合いながら対応している。	職員は入居者一人ひとりの話に耳を傾け、傾聴する姿勢でケアに臨んでいる。入浴や排泄時の同姓介助等には出来る限り希望に沿い、スピーチロック等気になる点については注意喚起できる関係が出来ている、守秘義務については、入職時に誓約書を交わしている。個人情報の使用について家族と同意を交わし、漏洩しないよう徹底している。	職員は、居室等の入退室の際ドアの閉め忘れやノックを忘れるとして、気を引き締めて対応するようミーティングが行われており、今後も継続した取り組みに期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中でご本人の自己決定を尊重したケアを心掛け、ご本人の意見や思いを発言できる環境作りをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員間で話し合いながら個々にあった計画を検討し、散歩や外出を個別に行い、一人ひとりのペースを大切にケアを心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみに関しては起床時や入浴時、必ず職員が確認し、本人様と衣類を選ぶようにしている。自室の洗面台には好みの化粧水を置き、自由に使用されている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの状態に合わせた食事形態を準備している。食事の準備や片付けなど、負担にならない程度職員と一緒に手伝いして頂いている。	ホームでは毎食炊飯のみを行い、副食その他は法人厨房で作られている。職員はつぎ分けや温め直しを行い、個別の食形態に応じている。定期的に食レクの日を設け、入居者の希望を聞きながらホームでの調理を企画し、手巻きずしや瓦そば、冬場は温かいおでん等が手作りされている。入居者の先人の知恵を拝借しながら、梅ジュースや干し柿作り等を楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量が把握できるように毎食記録を残し、必要な方には水分チェック表を用いて水分不足にならないように心掛けている。ご飯の量を一人ひとりに合せた量で提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後スタッフ見守りで口腔ケアを実施し、必要に応じて介助している。訪問歯科診療にて治療やメンテナンスを定期的に行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者全員の排泄チェック表を作成し、排泄時間を把握し個々に合せた声掛けや誘導に取り組んでいる。また夜間の排泄状況の観察を行い排泄用品を使い分け、ご本人に合せた支援を行っている。	排泄チェック表により個々のパターンを把握し、トイレへの声かけや誘導を行い、自立した入居者は近くのトイレを行き来されている。排泄用品は入居者毎に選択し、日中のリハビリパンツから夜間帯はオムツに変更したり、尿量や時間を見てパットの容量を変え、こまめなトイレ誘導により排泄用品の負担軽減に努めている。立位が難しい入居者には2名介助で対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量を確認し、水分摂取を促している。主治医より処方された薬で調整。他にも、個々に合わせた自然排便に繋がる飲食物を選んでいる。毎日の体操などで活動量を増やし、自然排便が出来るように取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴後は必ず掃除をして、お湯の入れ替えをし気持ちよく入浴できるように心掛けている。入浴する曜日や時間帯の希望を確認しながら個々に合わせている。またその都度対応している。	浴槽の湯は入居者毎に入れ替え、週3回は入ってもらうこととして他の日は清拭としている。入浴拒否をされる方は少ないようであり、1対1の時間を楽しみ会話を弾んでいる。身体状況によっては2名介助で対応し、汚染時にはそのまま入浴に誘い清潔保持に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりのペースに合わせ、日中の活動ができるように支援し、夜間は無理強いするような就寝が無いよう努めている。穏やかな気分で眠りにつけるように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人の薬ケースに薬の説明書を貼り、職員が把握できるようにしている。薬の変更・追加時などには個人申し送りに記入。状態変化時には主治医に連絡し、指示を仰いでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除や食事の準備など負担にならないよう気をつけながら、出来るだけ職員と一緒に手伝って頂いている。季節の行事では物作りや司会、挨拶など、その方に合せた役割を担って頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍の中、感染防止の為、極力外出は避けている。敷地内の散歩や日光浴など行っている。家族やご友人とも外出が出来るようになった際の楽しみとして話題が上がっている。	外出が背資源された中で、車中からの紅葉見学、受診時にドライブして帰る等出来ることで支援している。食レクや週1回のおやつの日、室内運動会などを通してコミュニケーションを図り、外出が出来ない中でホームでの生活を充実させている。	職員は、感染症収束後の楽しみとして、外出先の話題を入居者とともに盛り上げる等室内生活に創意工夫されている。今後も外出したい思いを引き出し、それに代わる方法を検討されるであろうと大いに期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	希望に応じてお金をお預かりして管理している。入居者様にはお金を預かっていることを十分に説明して、買い物時などにはお好きなものを購入できるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族や友人に連絡したい方は自由に電話が出来るようにしている。ご家族にも面会が難しい時には、電話をしていただくよう声掛けを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入浴後は必ず掃除を行い、その都度お湯の入れ替えを行っている。共通のトイレはこまめに掃除し、使用される方が不快にならないように心掛けている。湿度・温度計を確認しながら湿度・温度を調整している。	昨年3月に2階に新ユニットが増設されたホームは、1階玄関内の植え込みを改装し、レラス席として入居者の気分転換や家族との面会場所として活用を広げている。日中は殆ど入居者がホームで過ごされており、事務スペースからも入居者の行動や表情を確認でき、掃除の行き届いた室内である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	窓辺に椅子を配置し、外を見ながら新聞を読まれる方やソファでくつろがられるなど利用者が思い思いに過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、家具やご家族の写真などお好きなものを飾られ居心地よく、安心して過ごして頂けるようにしている。	入居に当たり、使いなれた物の持込みを家族に依頼している。テレビやハンガーラック、チェストなどの家具や、写真や日用品などの小物が置かれ、使い勝手を考慮したレイアウトとしている。居室の掃除は専任者が当たり、感染症対策や居心地の良い居室環境である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの心身状態に合わせて、掃除や食事の準備を職員と一緒にして頂いている。ケアの統一を心掛け安心した生活ができるように努力している。		